野山の花 ― 身近な山野草の食効・薬効 ―

城西大学薬学部　白瀧 義明（*SHIRATAKI Yoshiaki*）

キササゲ　*Catalpa ovata*　G. Don
（ノウゼンカズラ科 Bignoniaceae）

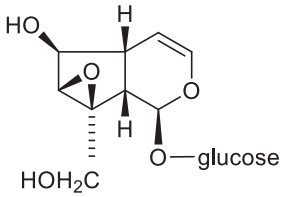
秋も深まり，秋風が心地よく吹き抜ける頃，山裾を歩いていると，寺社の境内などで細長い多くの果実を付けた樹木を見かけることがあります。これがキササゲです。キササゲは高さ 5 ～ 10m にもなる落葉性小高木で幹も太く，直径が 60cm に達するものがあり，葉は桐のようで大きく，やや三角形状の広卵円形です。中国原産とされますが日本各地の河川敷など，湿った場所に野生化した帰化植物です。花期は 6 ～ 7 月，淡黄色で内面の奥に紫褐色～暗紫色の斑点のある花を咲かせ，秋に実る果実は細長い蒴果（さくか）で豆の仲間のササゲ（大角豆（ささげ），豇豆（ささげ））*Vigna unguiculata* に似ていることからキササゲ（木大角豆（きささげ），木豇豆（きささげ），梓（あずさ），楸（ひさぎ））といわれます。日本では「梓（し）」の字は一般に

写真 1　キササゲ（花）

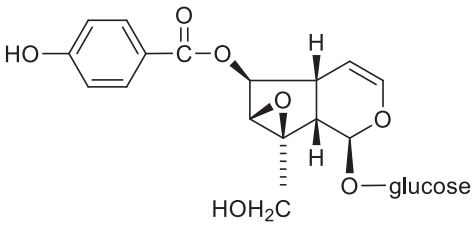
写真 2　キササゲ（果実）

写真 3　キササゲ（楸）の大木

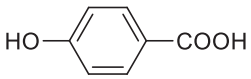
写真 4　生薬：キササゲ（梓実）



catalpol



catalposide



p-hydroxybenzoic acid

図 1　成分の構造式

「あずさ」と読まれ，カバノキ科のミズメ（ヨグソミネバリ）*Betula grossa* の別名とされていますが, 本来はキササゲのことです。また, 楸(ひさぎ)はアカメガシワ *Mallotus japonicus* とする説もありますが, 本来はトウキササゲ *C. Bungei* のようです。本植物の果実は細長く，長さ約 30cm で房状に垂れ下がり，熟すると先端より 2 裂し，多数の種子を放出します。種子は偏平で両端に糸状の長い毛があり，果皮は薄くて折れやすく，においはほとんどなくわずかに渋い味がします。生薬としては果実が熟し，緑色から褐色に代わる頃，採取し，乾燥したものが良く，全開したものは品質が劣るようです。生薬名をキササゲ（梓実(しじつ)，Catalpae Fructus）といい，腎炎，ネフローゼ，脚気，低血圧などで浮腫があるとき，利尿薬として使われます。利尿効果はキササゲに南蛮毛(なんばんもう)（トウモロコシ *Zea mays* の雌花の長いひげ状の花柱）を加えるとより効果的だそうです。また，根皮は梓白皮(しはくひ)といわれ，解熱，解毒剤として皮膚のかゆみやできものなどに利用されます。果実の成分としては，イリドイド配糖体の catalpol, catalposide など，フェノール化合物の *p*-hydroxybenzoic acid，灰分（カリウム塩）などが報告され，民間薬として利用されてきました。同属植物に花は白色で内面に紫色の斑点があるトウキササゲ，花は白色で紫褐色の斑点があるアメリカキササゲ *C. bignonioides* などがあり，トウキササゲの果実もキササゲ同様，生薬のキササゲとして日本薬局方に収載されています。

民間薬と漢方薬の違い：漢方薬は，根拠となる出典があり，葛根湯，小柴胡湯のように，傷寒論などの古典に記載され，証に基づいて処方され，生薬を一定の割合で組み合わせて用いることが多い。一方，民間薬は理論的な背景はあまりなく，民間伝承によって伝えられ，生薬を単一で用いることが多く，センブリ，ドクダミ，ゲンノショウコなどがよく知られています。

連絡先：白瀧　義明
城西大学薬学部生薬学教室　shiratak@josai.ac.jp